

青青会

大蔵流狂言 第六十一回

◆入場料 全席自由席（見所は座敷です） 一般 二〇〇〇円 学生 一〇〇〇円



一般財団法人 杉並能楽堂主催

平成三十年 二月十八日（日） 午後一時半開演
杉並能楽堂

次回公演のご案内 山本会別会

平成 30 年 4 月 30 日（月・振替休日）
午後 2 時開演（午後 1 時開場）国立能楽堂

狂言『麻生』	シテ：山本 東次郎
狂言『鐘の音』	シテ：山本 則俊
狂言『通円』	シテ：山本 則秀
狂言『若市』	シテ：山本 泰太郎

Suginami Nohgaku

杉並能楽堂

十貫坂上

※駐車場はございませんので
車での来場はご遠慮下さい

中野通り

マルエツ プチ ●和菓子店

タバコ店 ●クリーニング店

寿橋

中野富士見町駅

Nakano-fujimicho Sta.

東京メトロ丸ノ内線 中野富士見町駅より徒歩 5 分

杉並能楽堂

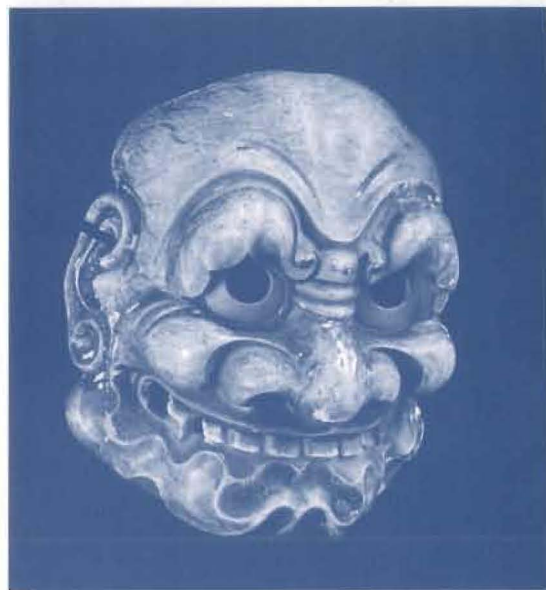
〒166-0012

東京都杉並区和田 1-55-9

TEL 03-3381-2279

表紙 立浪（山本東次郎家所蔵・肩衣より）

Photo: Yoshiaki Kanda



◎抜殻（ぬけがら）

使いを頼む時、いつも酒を振る舞ってくれる主人が、今日に限って忘れていた。ようやく思い出してくれたが、いつもと違う段取りについて飲み過ぎてしまった太郎冠者。使いにやったものの心配になった主人が様子を見に行くと、太郎冠者は道の真ん中で眠りこけていた。呆れ返った主人は、少々懲らしめてやろうと、眠っている太郎冠者の顔に鬼の面を付けてしまう。

◆「抜殻」シテ使用面「鬼」

鬼の面でありながら凶悪さが微塵もなく、完璧な造形美を誇る狂言面の傑作。顎髭のような曲線模様が殊に目を引く。面としては小振りな大きさだが、舞台上では決して小さくは見えず豊かな表情を見せる。今回の「抜殻」の他、「首引」「神鳴」などで使用される。伝河内井関家重作。桃山時代。山本東次郎家所蔵。

青青会 番組

佐渡狐

シテ（佐渡の百姓）

若松

隆

アド（越後の百姓）

山本

則重

アド（奏者）

山本

則俊

休憩

鎌腹

シテ（夫）

山本凜太郎

アド（妻）

山本

則孝

アド（仲裁人）

山本東次郎

休憩

抜殻

シテ（太郎冠者）

山本泰太郎

アド（主）

山本

則秀

◎佐渡狐（さどぎつね）

例年のように年貢を納めに都へ上る越後のお百姓、旅の途中、同じように都へ上る佐渡のお百姓と道連れになった。互いに似合いの二人だと喜んでいたのもつかの間、越後のお百姓がふと口にした「佐渡には狐がいないだろう」の一言が佐渡のお百姓のプライドを傷つける。狐がいるかないか、刀を賭け物にして、都の奏者（取り次ぎの役人）の判定に委ねることにした二人、佐渡のお百姓は奏者を味方につけようと画策する。

◎鎌腹（かまばら）

あちらこちらの家の頼まれ仕事でなかなか家に帰れない夫、ようやく帰宅した途端、待ちかねた妻に、山へ行って木を切ってきてほしいとせつつかれる。動かない夫に堪忍袋の緒が切れた妻は、夫を打ち殺して自分も死んでやると、棒を持って追いかける。仲裁人の取りなしでその場をおさめ、妻の言いつけに従って山へ出掛けた夫であるが、妻に殺されるよりも自ら死んだ方がいい、世間の人が感心するように格好良く死のうと考える。